

【開催概要】

公開シンポジウム「近代日本の偽史言説 その生成・機能・受容」
二〇一五年十一月七日（土）一四時～一七時四五分

八日（日）一〇時～一七時三〇分

於 立教大学池袋キャンパス 五号館第一・第二会議室

十一月七日（土）

偽史言説へのアプローチ

小澤 実（本学文学部准教授）

◆第一部 神代史という伏流

神代文字と平田国学

三ツ松誠（佐賀大学地域学歴史文化研究センター講師）

自己増殖する偽史——竹内文献の旅と帝国日本——

永岡 崇（日本学術振興会特別研究員）

◆第二部 「歴史」の創造

偽文書「椿井文書」が受容される理由

馬部隆弘（大阪大谷大学文学部講師）

十一月八日（日）

戦時下のプロパガンダ

——小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』を読む——

石川 巧（本学文学部教授）

「日本古代史」を語るといふこと

——「皇国史観」と「偽史」のはざま——

長谷川亮一（千葉大学文学部非常勤講師）

◆第三部 海外偽史との接触

「失われた大陸」言説の系譜

——日本にとつてのアトランティスとムー大陸——

庄子大亮（関西大学文学部非常勤講師）

日猶同祖論——旧約預言から『ダ・ヴィンチ・コード』まで——

津城寛文（筑波大学大学院人文社会科学研究所教授）

ユダヤ陰謀説——日本における「シオン議定書」の伝播と受容——

高尾千津子（東京医科歯科大学教養学部教授）

主催 立教大学日本学研究所

共催 立教SFR「グローバルヒストリー」のなかの近代歴史学（研究

代表者 小澤 実）

【発表要旨】

◆第一部 神代史という伏流

神代文字と平田国学

三ツ松誠

漢学隆盛の江戸時代後期に在って、日本の古典をこよなく愛した本居宣長は、我が国の古代を精神面で回帰すべき理想境として位置付け、そ

それが中国的要素によって墮落せしめられたのだと説いた。「道」、曆、そして文字、いずれも現在用いられているものは中国から流入したものであり、宣長はそれらがなかった時代の日本を評価する。そんなものが無かろうと日本はそれで充足していたのだ、というのが宣長の立場である。

平田篤胤は宣長の没後門人を自称したが、かかる宣長説に満足できなかった。彼は海外の古伝説をも読み込んで我が国こそが全世界の文化の発祥地であると唱え、漢字渡来以前の日本固有の文字、神代文字の実在をも訴え、それなりの追隨者を生み出す。しかしその神代文字の姿は、篤胤の主張とは逆に、ハンゲルからの剽窃を疑われるものであった。

宣長が時に近代国語学・国文学の祖と目されるのに対し、篤胤が同様の評価を受けることはほとんどない。しかし神代文字の如き偽史的想像力の祖型としてみるならば、篤胤は近代日本にとって無視しがたい存在だと評価できよう。

自己増殖する偽史——竹内文献の旅と帝国日本——

永岡 崇

近代日本に現れた多くの偽史文献のなかでも、もっとも著名なのは竹内文献（天津教文献）であろう。保持者である天津教教主・竹内巨磨の語るところでは、この文献は越中国の天神人祖一神宮に長く伝えられてきた神宝であり、明治二十年代に「発見」された。その後、昭和初期に酒井勝軍ら研究者や矢野祐太郎ら宗教家に注目され、時間的には記紀の記録よりもはるかに遡る超古代史文献として、空間的には世界大のス

ケールをもつ壮大な歴史史料として知られるにいたった。他方では、狩野亨吉に偽書の烙印を押され、竹内らが不敬罪で検挙されたこともあり、「トンデモ本」の代名詞といったイメージも定着している。

本報告では、竹内文献をめぐるネットワイク型の運動の存立を可能にしたものとして、竹内巨磨の受動的な主体性に着目し、同時代のカリスマ的宗教指導者である出口王仁三郎の主体性との比較を通じてその特徴を浮かび上がらせる。また、天津教事件裁判における竹内らの主張および狩野亨吉らの文献批判に対する反論の分析を行い、言論の国家への一元化を志向する一九三〇年代の国家体制のなかで、裁判所という公の場にある種の論争の場に変えようと試みたこの運動の歴史的意義を考えた

◇第二部 「歴史」の創造

偽文書「椿井文書」が受容される理由

馬部隆弘

椿井文書とは、山城国相楽郡椿井村（現京都府木津川市）出身の椿井政隆（一七七〇～一八三七年）が、依頼者の求めに応じて偽作したもので、中世の年号が記された文書を江戸時代に写したという体裁をとることが多い。そのため、見た目には新しいが内容は中世のものだと信じ込まれてしまうようである。彼の存在は研究者の間でもあまり認知されていないため、正しい中世史料として世に出回っているものも少なくない。

椿井文書は、近畿一円に数百点もの数が分布しているというだけでな

く、現在進行形で活用されているという点で他に類をみない存在といえる。本報告では、まず樺井文書の作成手法や伝播の仕方を紹介することで、いかがわしいにもかかわらず受け入れられてしまう理由を明らかにする。そのうえで、樺井文書の内容がさも史実かの如く定着していく過程や、そこへの歴史学の関与の仕方など、樺井文書受容の問題について幅広く論じたい。

戦時下のプロパガンダ

——小谷部全一郎『成吉思汗は義経なり』を読む——

石川 巧

大正八年に日本陸軍の通訳官として満洲・シベリアに赴任した小谷部全一郎は、『成吉思汗ハ源義経也』（原題『滿蒙踏破・義経復興記』）を完成させ、倫理学者・杉浦重剛の支援を受けて『成吉思汗は源義経也』（大正一三年一月、富山房）を出版する。同書は世間の評判をよび再版を重ねるが、国史学、東洋史学、考古学、民俗学、国文学、国語学、言語学の領域から集った正統の学者たちは、『成吉思汗は源義経に非ず』（大正一四年五月、国史講習会編）を緊急出版してそれを厳しく批判する。小谷部全一郎による再反論『成吉思汗は源義経也』著述の動機と再論（大正一四年、富山房）なども出版され、激烈な「義経Ⅱ成吉思汗論争」へと発展する。

また、同書は大東亜戦争のまっただなかに興亜国民版（『成吉思汗は義経なり』昭和一四年六月、厚生閣）として増補出版され、戦時中のプロパガンダとして活用される。ここでは、成吉思汗と源義経を同一化する

を試みを通じて、満洲国建国の正当性、および、日本民族が盟主となつて東アジアを欧米諸国の支配から解放しようとする大東亜共栄圏の思想が、歴史的必然として語られるのである。

ただし、発表者の関心は、興亜国民版『成吉思汗は義経なり』に記された内容にあるわけではないし、この奇書をプロパガンダとして活用した戦時中の大政翼賛体制を安直に批判しようと思っているわけでもない。問題は、人々の口承、遺跡、言語の痕跡などを採取しながら民間伝承の重要性を訴えていく小谷部全一郎の記述が、それを学問的知見から論破しようとするアカデミズムの言説を呑み込むように増殖し、研究者の批判にも屈しない強度を獲得していく過程にある。坂口安吾が「風博士」（『青い馬』昭和六年六月）に戯画化したように、あるいは、のちに松本清張が数々の反アカデミズム小説でこき下ろしたように、その領域の学者や専門家たちが主張する「真実」は、ときとして、自らが批判する対象をより強固なものに仕立てていく逆説性をはらんでいるのである。今回の発表では、そうした観点から興亜国民版『成吉思汗は義経なり』という書物を読み直し、偽史はなぜ大衆を惹きつけるのかを検討したい。

「日本古代史」を語るということ

——「皇国史観」と「偽史」のはざま——

長谷川亮一

近代天皇制国家は、その正統性の根拠を『日本書紀』の建国神話に求めており、それゆえ、国史教科書における古代史Ⅱ建国神話叙述は重視

されることになった。そのため戦後、「皇国史観」の克服が叫ばれる過程で、古代史叙述の書き直しが重視されることになる。しかし、そもそも日本古代史を重視する、という発想自体が、日本が古代以来、その基本的な性格を変えずに一貫して存続してきた、というイメージを存続させることにつながっているのではないか。

そもそも、「正史」は国家自身を自己正当化する役割を持つものであり、しばしば歴史の歪曲を引き起こす。したがって、「正史」は「偽史」の対概念ではなく、むしろ「正史」それ自体に「偽史」としての性質が含まれている。また「偽史」の側は、常に自らが「正史」にとってかわろうとする性質を持つ。

本報告では、十五年戦争期のいわゆる「皇国史観」の「偽史」性を前提として、戦中期から戦後にかけての古代史叙述を対象に、「歴史を書き替えようとする欲望」という観点からの考察を試みたい。

◆ 第三部 海外偽史との接触

「失われた大陸」言説の系譜

——日本にとつてのアトランティスとムー大陸——

庄子大介

本報告テーマは、「太古の文明が栄えた陸地が、大災害で海に没した」という西洋由来の「偽史」の、日本的受容である。こうした陸地のイメージは、古代の哲学者プラトンが思想表現のため創作した、大西洋の「アトランティス」に遡る。それは近代西洋において、文明誕生の地とも見

なされるようになり、日本では哲学研究者の木村鷹太郎による解釈を経て、「竹内文書」などの偽史に影響を与えた。一方、環太平洋の諸文明の由来と想定されたのが、太平洋版アトランティスというべき「ムー大陸」である。近代の作家らが生み出した架空の存在だが、日本においては南進論と絡まりつつ受容され、自国を「広範な影響を及ぼしたムー文明の末裔」と見なし、対外進出を正当な復権のごとく論じる者もいた。これらの偽史はもちろん批判にさらされてきたが、今でもロマンあふれる歴史として受けとめられたり、ポップカルチャーに取り入れられたりと、日本社会に浸透し続けている。こうした現状も視野に入れ、「失われた大陸」言説の系譜をたどっていききたい。

日猶同祖論——旧約預言から『ダ・ヴィンチ・コード』まで——

津城寛文

日本、ユダヤの二語を入力してネット検索すると、最初の一〇くらいは日猶同祖論に関するサイトが出る。現代の話ではなく千年以上前の話に大衆の関心が集まっているのは、説明を要する事態である。日本民族・文化の起源・系統は、正統史学や人類学も共有する関心事であるが、ここでも、遠く中東やヨーロッパから、細々ながら人間の流入があったことは否定しきれない。その細い流れのひとつを、日本古代史の主流に位置付けるのが日猶同祖論であり、こうした異説の種本を書いたのは、明治初期に来日したスコットランド商人であった。そのサブテキストは旧約の「失われた十部族」預言であり、当時の観察と絡めて、日本人の一部は失われた十部族の末裔だと主張された。他方、最近の話題作『ダ・ヴィ

ンチ・コード』のサブテキストは、いわば「失われなかった二部族」説であり、「失われた十部族」預言と割符の関係にある。このように、日猶同祖論は日本産ではなく、キリスト教世界発の異説と捉えると、別の相貌が浮き彫りになってくる。

ユダヤ陰謀説——日本における「シオン議定書」の伝播と受容——

高尾千津子

二〇世紀初頭にロシア帝国でねつ造された偽書『シオン長老の議定書』（以下「議定書」）が、ロシア革命後いわゆる「ユダヤ陰謀」説の「根拠」として世界中に伝播してからおよそ百年が経過した。戦間期の政治、経済的な危機と混乱のなかで、「議定書」は各国でさまざまな「解釈」を生み出していった。日本における「議定書」の起源は、シベリア出兵時に反革命・白衛派を支持する日本軍の通訳によりウラジオストクで翻訳されたのが始まりであるが、早くも一九二一年には日本の言論界でその真偽が問題にされている。西洋ではユダヤ陰謀論そのものは古くから存在していたが、欧米諸国とは異なり、ユダヤ人社会が存在しない日本でなぜユダヤ陰謀説や「議定書」が広まり、受容されていったのだろうか。報告ではシベリア出兵時における日本への「議定書」の伝播と受容を中心に、戦前日本における「ユダヤ人」をめぐる言説について考えてみたい。